

## これからの文明学科について

松本 富士男

今回のパネラーは、文明学科の初期から在任している、いわば二〇年選手です。他の御両人は、文明理論を担当され、私はどちらかといえば、文明史の立場に立っています。

昭和四〇年に文明学科が創設され、まずアジア課程が設置され、翌四一年にヨーロッパ課程が置かれ、かれこれ四半世紀たちました。

私は、当初非常勤講師で、「イコングラフイ」を教え、昭和四四年から専任となりました。渡瀬先生も同年にこられ、それ以来ということになります。

大学紛争の頃ですが、文明学科が好きでこちらに移って参りました。一、二年たつてかの頃、霞が関の校友会館で、文明学科の教員と松前総長とが、文明学科について懇談したことがありました。その時、私は、アメリカコースとアフリカコースをつくること、さらに当時の云い方での「公害コース」、現在であれば、環境問題コースの設立を提案したことをはっきり憶えています。総長は、「公害コース」について関心をもたれて、秘書の方に若干の指示を与えておられました。立ちぎえになってしまいました。

### 地域研究について

当文明学科の構成をみますと、アジアの四課程とヨーロッパの二課程ということで、地域を文明研究の一つの柱としていることが判ります。であれば、アメリカコース（南米を含めて）とアフリカコースが、更に増設されるべきでしょう。

アメリカコースについては、問題ないと思います。教員候補も多く、学生も、主な語学が米語ということであれば、もちろん、スペイン語も加わりますが、志願者も多く集まることでしょう。問題ありとすれば、予算ということになります。

アフリカコースは、時期尚早かもしれません。まず講師の問題、スワヒリ語だけにしても、語学ができればよいという訳にかず、業績の点にいろいろ難があることになりました。また学生の就職先もあまり広いとはいえません。しかし、これから、未開拓の研究領域として注目しつづける必要はなりません。

環境問題コースは、私見によれば、募集人員二〇名位にしぼった方がよいと思います。それは、入試科目に理数系を加えないと、問題追及できませんし、公害問題を公務員の立場からアプローチ

すると、公務員の試験に合格してもらうことが大切で、少数精鋭、文学部の考古学課程と同じような理念で望む必要があります。広報学科との関係も考えられますが難しいでしょう。

以上が、現在の文学学科の構成についての考えですが、これには、文学部から独立して文学部にしてよいのではないかとという提案が根にあります。文学学科の成立についてのへいきさつはあまりにも有名で、今更ここで繰り返しません。最近の他大学の新設学部を見ると、なるほどこのような視点もあつたかと思ひし、文部省も昔とは違っているのではないかと思ひます。

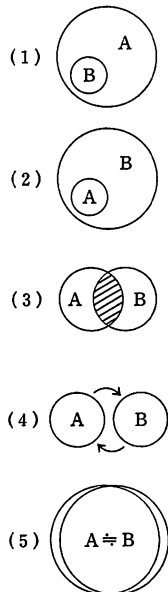
### 文学部について

現在の文学学科の教員数三〇数名、学生数からみても、一学部となりうるボリュームがあり、そもそも文明という概念が学科より学部段階以上のもので、広い視野と研究領域があります。文明史のみにおちいらず、今までのへ分化と総合や、諸学問のへ交通整理といった観点からだけではありません。

現代を視座の中心におく点で、史学科との違いを強調し、さらに日本を、特にこれからの方向がいかにあるべきかを追求すべきだろうと思ひます。

では、何故文学学科が普及しないのかという問いに対しては、間口が広すぎて、独自の方法論をまだ見出してないへうらみがあるからと思ひます。さいわい、比較文学会も設立され、これまでの議論が整理されつつあります。成蹊大の文化学科など似た

学科をみても、研究課題をどこに集約するかという難問があるように思ひます。比喩的にいえば、国立大はともかく、他の私立大に出来ることが望ましいことです。では、文化と文明とをどう関連づけるかといへば、私は、新入生にいつも次のように説明しています。文化をA、文明をBとすれば両者の関係には、



おおよそ、以上の五つの関係があるようです。

(1)は、文化の都市化したものが文明であるというようないままでの文化人類学の立場でしょう。つまり、文化がより文明より広い概念だという立場です。

(2)は、その逆で、文明を文化より広い概念とし、文明を総合の立場からみる、たとえば、A・J・トインビーや、松前総長の立場といえましょう。

(3)は一般的に、精神文化と物質文明といったかつての類型的考へで、ある部分で共通したところがあると考へた方がよいでしょう。

(4)は、文化から文明へ、そして新しい文化へといった立場で、

たとえば、シュペングラーなどを入れてよいでしょう。

(5)は、文化と文明は、現在においては、同質化しつつあるといった、マルクーゼなどの立場です。少し附け加えますと、いつも、卒論で、一年間の新聞をとりあげ、文化と文明の用法を比較してみたら面白いぞといっているのですが、なかなかよい論文に仕上がったのに出会いません。意図は、現代の日本では、文化と文明は、相当接近した概念となっているのでないかとみているからです。

一回目の松本亮三先生の発表で、フェノタイプ(表現型)とジエノタイプ(遺伝子型)に分けて論じておられ、とても興味ある立場であると思いましたが、私は、現在まで、現代文明を中心に考えてきましたので、これからの課題として、現代文明ならざる生存様式について考えたいと思います。

### 教員の問題について

かつて、当大学の文明学科について、私はへはじめに文明学科ありきであったといったことがあります。文明学科卒業の教員が、教員となっておらず、現在の教員は、専門は、哲学あり、歴史あり、宗教ありで、発表する学会は、既成の学会であり、比較文明学会にも教員しか入会しておりません。卒直にいえば、もつと入会してほしいと思いますが、この学会の在り方に問題があるかどうか、当面、東海大の文明学会を充実していくのがベターといえるかも知れません。

文明学科の教員は、自身の専門と総合化、あるいは、比較といった二つの〈系〉を課題とすることになります。史学だけなら、史学科がある訳ですから、地域研究という視点などをもう一つの〈系〉とするなどが一例としてあげられます。

よく文明学には、独自の方法論がなく、文化人類学や史学の方法論によっていると批判されます。たしかに現在は、充分とはいえませんが、これからの学問対象としうる蓄積があり、社会の方向を見定めるに必要な分野であります。

最近、京大の学長が、湯川さんが三代目、福井さんが四代目で、それがノーベル賞をもらうに必要な年月だったと書いておられました。

文明学科にしても、私たちが二代目で、二〇年選手ということになります。今までの教員は、文明学科卒業がいないと先に述べましたが、これからの教員は、文明学科の性格を納得してもらってこられるようにしたいものです。

おそらく、文明学科では、共同研究が重要な柱となります。総合化には、どうしても一人では、対応しきれないところがあるからです。現在、こうしたシンポジウムを開いたり、研究会が、定期的に院生を中心に行なわれていることは、よろこばしいことです。

### ささやかな実践例

私は西欧課程ですが、昨年大学院のゼミで、久米邦武編修の

『特命全權大使米欧回覽実記』（明治十一年、博聞社）全五冊をテキストに使用し、明治時代の最初期に、岩倉使節団が、画期的研修を一年数ヶ月に亘って行ったことを取り上げました。使節団は、米国から、ヨーロッパをまわり、たとえば、英国は、日本より四〇年進んでいる等の体験をし、帰国後の日本の方向を定めたといえる重要な旅行をしました。伊藤、大久保なども参加し、文明論研究においても、東西比較文明史としてユニークなものといえます。

加えて、東欧の小船井教授から、ピョートル大帝が、一六九七年から一五ヶ月にわたって、ヨーロッパへの大使節団を組織し、それには皇帝自身も加わっていることを教示されました。

日本の岩倉使節団の百数十年昔のことですが、まさに〈周辺文明〉を証明するような東西の出来事で、あまりの類型におどろきました。しかし、B・O・クリュチエフスキーは、『ロシア史講話』（恒文社）四巻において、文明より技術を学ぼうとしたとあります。そして、久米のような報告書の残っていないことは残念なことです。

第二例として、大隈重信と大日本文明協会と、松前重義と東海大学における文明論的活動の比較です。一方は大正、他方は戦後ではありますが、大隈の遺著とされる『東西文明の調和』（大正一一年）に、大正時代の文明論の結論をみる思いがします。松前総長の『現代文明論』も戦後の一つの文明論的業績ですし、福沢に始まる文明論の承譜をここに辿ることができます。

岩波新書の丸山眞男著『文明論の概略』を読む（一九八六）や、梅棹忠夫著『文明の生態史観』（昭四二）などにより、文明学科の必読文献リストの作成もこれからの課題と考えています。

以上、私の体験的な二〇年の歩みの一端を申し述べること、パネラーの責をふせぎたいと思います。